

「分数ができない大学生」といわれるほど、日本の学力レベルの低下が心配されています。このような結果がもたらされていることについては、いろいろな問題が考えられると思いますが、私が何より心配するのは「国語がきらい」という子供が増えていることです。

たとえ算数でも、文章題が出てくると、それを読み解く国語力、言葉の力がなければ、問題の意図を理解することはできません。また、言葉の力が弱くなると考える力、思考力も低下してきて、結局は日本人としてのレベルを下げることになります。

子供たちによく聞いてみますと、国語ぎらいの理由は、実は「漢字が苦手」「漢字がきらい」からきていることが多いのに気づかされます。「漢字がしっかり覚えられない」「漢字のテストの点数が悪い」、だから「国語がきらい」「本を読むのは面倒」となってしまうわけです。

こんなふうになっている理由はいくつか考えられますが、なかでも大きな問題は、子供には「ひらがなから教えたほうが覚えやすい」「漢字はできるだけ簡単なものから」という誤った考え方と、さらに「読み書き同時学習」といって、読める漢字は同時に書けなければいけないという思い込みにあります。実際、今の日本の小学校では、入学す

るとまず、ひらがなから学習を始めますし、漢字の読みと書きは同時に進んでいきます。これが漢字ぎらい、国語ぎらいの子供を増やしていると言っても決して言いすぎではありません。

実は、文字の学習では、低学年の子供ほど、ひらがなよりも漢字のほうがやさしいのです。私のこれまでの体験でも、小学校に入学する前に、小学校六年間で学習する漢字1006字を完全にマスターした子供たちはたくさんいます。

大脳生理学の研究では、七、八歳ぐらいまでの子供は、丸暗記能力に優れていることが明らかになっています。そんな子供にとっては、字形が単純なひらがなより、字形が複雑で記憶に残る手掛かりの多い漢字のほうが覚えやすいのです。また、ひらがなは、一字一字には意味のない、耳で理解する言葉ですが、漢字は、一字一字具体的な意味や内容を表していますし、目で理解する言葉なので、イメージしやすく、その分興味ももちやすいのです。

子供たちは小学校に入ると、たとえば「予防注射」という漢字を習うのに、一年生では「よぼうちゅうしゃ」と全部ひらがなで習い、学年が上がるにつれて「よぼう注しゃ」「予防注しゃ」「予防注射」と変化して

石井式で漢字力・国語力が驚くほど伸びる

いきます。しかし最初から「予防注射」と書いて読ませたほうが記憶に残りやすく、文字から受けるイメージも豊かになります。

また、ひらがなだけの文章よりも、漢字で表記できるものは漢字にする(「漢字先習」)、いわゆる「漢字かな交じり文」のほうが、子供は、より早く、よりの確に意味を把握しながら読めるのです。漢字の読みと書きについても、まず読みに力を入れ、書くことはあせらずに進めればいいのです(「読み書き分離学習」)。

私は、「明」は、昼を明るく照らす“お日様”と、夜を明るく照らす“お月様”とを組み合わせて明るいという意味を表した字だというように、漢字の成り立ちを教える「解字指導」に力を入れていますが、こうすると子供は書くことにも抵抗なく興味を示すようになります。しかも、学年が進むとともに、左脳が発達し、論理的に認識する能力が育っていきますから、この解字指導はますます有効になります。そこでこの本では、漢字の成り立ちを絵を使って解き明かし、漢字の面白さを楽しんでいただけるようにしてあります。

漢字は、すべての学問の、あらゆる教養の基礎です。漢字が苦もなく、頭に入る時期を逃さずに、子供たちにぜひ、漢字教育をしてほ

しいと思います。

2001年9月

教育学博士 石井 勲